

不順天候に対する農作物の栽培管理について

平成27年8月31日
農業技術課

1 作物

(1) 水稲

- ・早期落水を避け、粒張りや収量・品質の向上に努める。
- ・落水時期の目安は以下のとおりであるが、土壌条件や天候により調整し、収穫に支障の無い範囲で遅めとする。
 - 早生種：出穂期後30～35日
 - 中生種：出穂期後30～40日
 - 晩生種：出穂期後35～45日
- ・落水後、収穫までに水田土壌が乾き過ぎる場合は、「走り水」を入れて土壌水分を補う。特に、砂壤土では乾き過ぎには注意する。
- ・今後の気温や日照時間が登熟の遅速に影響するので、登熟積算気温を参考に「帯緑色籾歩合」に注意して適期刈取りを行う。特に籾が多い品種やほ場では十分に留意する。

(2) 大豆・そば

ア 一般管理

- ・降雨等による湿害防止のため、排水路の点検や整備を行い、必ず排水口につながっていることを確認する。

イ 防除

- ・大豆の紫斑病防除適期は、開花後2週間から4週間頃である。降雨が続くと発生が多くなるので、天候に留意するとともに、着莢部位に十分薬剤が到達するように散布する。
- ・大豆の紫斑病は、ベンゾイミダゾール系剤耐性菌が発生している地域では該当薬剤（長野県病害虫・雑草防除基準記載の剤では、トップジンM粉剤DL、トップジンM水和剤、ベンレート水和剤）の使用を控える。
- ・大豆の莢実害虫防除も、着莢部位に十分薬剤が到達するように散布する。

2 果樹

(1) 共通

ア 一般管理

- ・受光態勢改善のため、支柱立て、枝つり、徒長枝枝切り等を行う。
- ・降雨により園内が滞水しないように、排水対策を行う。

(2) りんご

ア 一般管理

- ・現状では成熟が平年並みからやや早めに推移している。これから収穫となる品種は、着色とともに果実成熟状況の双方に留意しながら、適期収穫に留意する。
- ・今後、曇天続きの後に突然、高温・強日射に遭遇すると、9月中旬までは日焼け果が発生する可能性がある。日焼け果軽減対策のために寒冷紗などの遮光資材を被覆してある場合は、今後の天気に留意して、除去時期を決める。
- ・適期に着色管理を行い、品質向上を図る。
- ・落果防止剤の散布は、成熟に応じて適期散布に心がける。

イ 防除

- ・炭疽病は今後の天候によっては9月上中旬まで感染の危険があるので、定期防除を徹底する。なお、効果が高い剤を使用するのが望ましいが、QoI剤（ストロビルリン系薬剤）は、耐性菌回避のためにこれ以降の使用は避けることが望ましい。

- ・今後も降雨が多いと、すす斑病、すす点病の発生が懸念されるので、降雨が続く場合は9月下旬まで防除を行う。
- ・ハダニ類は、園地によっては曇雨天であっても密度が高い場合がある。まず園ごとの発生状況を的確につかみ、発生が多い場合は、まだ本年度は使用しておらず、かつ効果の高い殺ダニ剤を散布する。

(3) もも

ア 一般管理

- ・曇雨天により果肉成熟が進み、収穫前落果が見られる。
- ・着色向上のため、必要な場合は反射シートを敷設する。
- ・果肉の成熟を確認しながら、収穫遅れとならないように適期収穫に努める。
- ・樹勢が強い樹では、下枝まで十分光が入るよう9月上中旬に秋季せん定を行う。なお、秋季せん定の程度は、凍害防止のため新梢切除率で3割程度を上限とする。

イ 防除

- ・多雨により腐敗果が多くなるため、予防的な防除を心がける。
- ・せん孔細菌病は、落葉して間もない落葉痕に感染しやすいため、台風が襲来すると風雨により落葉と感染が同時に起こり、多発しやすい。このため、秋季ボルドーは原則として台風襲来前に実施する。なお、効果を高めるためには、最低でも9月中旬とその2週間後の2回散布する。

(4) なし

ア 一般管理

- ・これから収穫を迎える品種は、熟度の進行に十分留意し、収穫が遅れないようにする。

イ 防除

- ・黒星病の発生が多い園は、9月の雨で越冬伝染源が増えるリスクが高まるので、収穫後に数回防除を行う。なお、殺菌剤は耐性菌を出さないよう、E B I 剤 (DMI) や Q o I 剤は絶対に使用しない。

(5) ぶどう

ア 一般管理

- ・果粒肥大は良好で、成熟も例年並みからやや早い、園地により糖度、着色がやや遅れている。
- ・副梢等の発生が多く、棚面が暗い園が多い。新梢の成熟が遅れているため、摘心等新梢管理を徹底する。また、二番なりが多い場合は併せて除去する。
- ・収穫は、品種ごとに成熟の状況を確認して適切に行う。特に「シャインマスカット」は8月下旬に低温・曇天が続くと成熟がいったん停止する特徴があるので、食味を確認しながら、十分に成熟した果実を収穫・出荷する。
- ・荷造り時には、病害虫果や障害果（裂果など）の除去に注意する。

イ 防除

- ・べと病の発生が多い園では、9月上中旬まで防除する。

(6) 日本すもも・プルーン

ア 一般管理

- ・雨よけ施設がない場合は、裂果の発生が見られる。
- ・成熟は全体的には進んでいるが、果実ごとのバラツキが見られる。
- ・果肉の成熟を確認しながら、収穫遅れとならないように適期収穫に努める。

イ 防除

- ・灰星病等の発生が多いので、防除を徹底する
- ・雨よけ施設でハダニの発生が多い場合は、防除を徹底する。

3 野菜

(1) レタス類

- ・先週末から曇天・降雨により、軟腐病、斑点細菌病、腐敗病、菌核病、べと病等各種病害が発生している。日照不足、降雨が続くと、さらに発生の拡大が心配されるので、生育初期から予防防除を徹底する。
- ・細菌性病害は、生育ステージに応じて、銅剤、オキシリニック酸混合剤、抗生物質剤を防除基準を参考に散布する。
- ・菌類病対策は、生育ステージに応じて、防除基準を参考に散布する。
- ・チップバーンが発生している場合は、カルシウム剤の葉面散布を行う。

(2) はくさい

- ・黒斑細菌病、べと病、ピシウム腐敗病等の発生と拡大が心配されるので、生育初期から予防防除を徹底する。
- ・細菌性病害は、生育ステージに応じて、銅剤、オキシリニック酸混合剤及び抗生物質剤を防除基準を参考に散布する。
- ・菌類病対策は、生育ステージに応じて、防除基準を参考に散布する。

(3) キャベツ

- ・黒腐病、軟腐病、黒斑細菌病等の発生・拡大が心配されるので、生育初期から予防防除を徹底する。
- ・細菌性病害は、生育ステージに応じて、銅剤、オキシリニック酸混合剤、抗生物質剤を防除基準を参考に散布する。

(4) アスパラガス

- ・露地栽培では、降雨により茎枯病の発生の増加・拡大するので、できるだけ罹病している茎の抜き取りを行う。

(5) ジュース用トマト

- ・低温・日照不足が続くと着色が遅れるので、収穫も終盤に入ってきている中、できるだけロス果の発生を防止するため、品質低下（規定養分不足）を招かないよう熟期を見極め適期収穫に努める。

(6) きゅうり

- ・うどんこ病の発生が拡大している。べと病、褐斑病等の発生・拡大が心配されるので、防除基準を参考に防除を徹底する。

(7) その他

- ・害虫では、温度の高い時期は過ぎたものの、まだ、コナガの発生時期であり、低温傾向ではあっても、その後の天候によって、被害の発生・拡大が心配されるので、発生状況に応じて薬剤散布する。薬剤散布に当たっては、ジアミド系薬剤の抵抗性の発達を助長しないよう、長野県病害虫・雑草防除基準に記載されているIRACコードを参考にローテーション散布を行う。

4 花き

(1) トルコギキョウ

ア 一般管理

- ・特に八重系品種では、日照不足の影響によりブラスチング（蕾の生育停止）の発生が多くなる。このため、活着後は早期に遮光用の被覆資材を格納し、古くなったフィルム資材は交換するとともに施設上部を点検し採光を高めるよう配慮する。
- また、不要な二次花蕾の整理を徹底するとともに、過度な追肥は行わない。

イ 防除

- ・曇雨天の影響で、通風が悪いほ場では花シミ（灰色かび病）による品質低下や切り花ロスが発生しているため、循環扇により湿度の均一化を促す。循環扇がないハウスでは、天窗や側窓等のできる限り開放して換気の徹底を図る。
- ・灰色かび病対策は、防除基準を参考に薬剤散布を実施する。なお、切り花直前では、汚れの発生に注意する。

(2) カーネーション

ア 一般管理

- ・特にスプレー系品種は、日照不足の影響から輪数不足や軟弱化となりやすいので、曇雨天時は遮光用の被覆資材を格納して施設内の光量を確保する。併せて、不要な芽や側枝を整理して株元の通風を高めるとともに、株元まで光が届くよう配慮する。

イ 防除

- ・黒点病が発生していたほ場では、今後の低温・多湿条件により再発が心配されるので、防除基準を参考に防除を実施する。

(3) きく

ア 一般管理

- ・露地きくでは、排水不良による下葉の黄化や根腐れなどの発生が見られるので、ほ場の周囲・内部に明渠を設置し、排水管理を徹底する。
- ・また、曇天の影響で花芽分化が促進されることが予想されるので、早めに芽整理を実施し品質の確保に努める。

イ 防除

- ・低温・多湿条件下では、白さび病、斑点細菌病などの発生が多くなるため、防除基準を参考にローテーションによる防除を実施する。なお、汚れの発生は品質低下となるので注意する。

(4) その他

ア 一般管理

- ・排水不良の圃場では、長雨による滞水で根傷みや下葉の黄化等が発生しているほ場もみられるため、明渠排水等の排水対策を図る。

イ 防除

- ・長雨、日照不足等により特に病害の好適発生条件となっている。このため、防除基準を参考にローテーション防除による病虫害防除を実施する。

5 飼料作物

- ・降雨による収穫作業遅れ等により、収穫適期を過ぎた牧草・稲ホールクロップサイレージは、乾乳末期や泌乳初期の給与量を控えるなど、給与方法に注意する。また、刈倒し後、長期間収集できず変敗したものは、給与を控える。
- ・やむを得ず高水分で調製する場合は、必要に応じてサイレージ添加剤等を利用する。
- ・飼料用トウモロコシで、日照不足による生育遅延が心配される場合は、雌穂の熟期を確認して収穫する。